

中国仏教研究方法の革新及び活用

聖 凱
訳 楊 小 露

まず、今回大谷大学真宗総合研究所で研究する機会を与えて下さいました木村学長に感謝の意を表します。また私は、仏教研究の後輩で、私が研究から得た感想を学長からご教示を賜り、諸先生方と交流をさせていただきたいと存じます。私の研究は主に南北朝期の仏教学派、仏教懺法、浄土仏教の現代的解釈などですが、本日は南北朝の学派、仏教懺法の研究について、皆様にご報告をしたいと思います。

一 南北朝の仏教学派

南北朝の仏教学派の研究は、二〇世紀初頭の中国仏教研究の進展とともに深まりつつあります。中国、日本、欧米諸国の学者が力を惜しまずに研究した結果、大きな成果が上げられています。特に一九九〇年代に入り、敦煌遺書の南北朝仏教学派の文献の整理と研究に従い、南北朝仏教学派の研究は独立した研究分野となり、盛んになりつつあります。日本の学者としては、平井宥慶、古泉円順、木村宣彰、荒牧典俊、石井公成、青木隆などの諸先生がこの分野の専門家であります。その最も代表的な研究成果としては、石井公成先生の『華嚴思想の研究』と荒牧典俊先生の『北朝隋唐中

『国仏教史』二書が教えられます。

南北朝仏教研究はすでに百年余続いています。しかし、未だ以下のような不十分ないくつかの点があると思います。

① 国際学界全体が、まだ考古学界の成果、特に石窟研究などの成果をよく利用していないこと。それらの成果は、学派の歴史や思想の研究に大変役立つと思います。② 具体的な学術的疑問がまだ解決されていないこと。たとえば『大般涅槃経集解』の編集者、涅槃学派の仏性思想の南方・北方における違い、成実学派の法雲・智藏の思想形態など。③ 現在の研究状況は、いまだ混乱状態にあり、学界全体の南北朝仏教に対する全体的研究が足りないこと。特に、南北朝社会史、経済史、儒教仏教道教の関係を、中国伝統文化の学術研究を背景とすれば、インド仏教の中国化の過程をよりよく理解できると思います。

私の南北朝仏教学派の研究は一九九九年から始まりますが、中国仏教学院の学生に『中国仏教史』を教えるときに、南北朝仏教学派についての疑問が生じ、研究をスタートしました。私の博士論文のテーマは『撰論学派研究』で、すでに出版されております。現在は『地論学派研究』を書き始めていますが、同時に涅槃学派、成実学派、毘曇学派、地論学派の伝承の歴史を研究し、それについての論文も書き始めています。

陳寅恪は、「二時代の学術は、必ずや新資料と新問題に直面する。新たな資料を用いて問題を研究することは、その時代の学術の新たな潮流となろう。この潮流に乗ることができる学者が予め潮流を読める人だと言えよう」と言っています。私は、陳寅恪の「新資料」と「新問題」のほかに、「新方法」を加えたい。学術の新たな展開は、「新資料」の発見、「新問題」の提出、「新方法」の活用があって初めてできると思います。

南北朝仏教学派研究は「新問題」ではありません。それはおびただしい中国仏教史の研究者が直面する問題でもあります。この百年に、この分野に新たな展開がない理由は、資料の散逸と現存資料解読の困難なことにあるのではないのでしょうか。ですから、南北朝仏教学派の研究は「新資料」の出現を待たなければなりませんでした。

いわゆる「新資料」とは、次のような五つであると思います。

一、『大正藏経』、『続藏経』の中にある南北朝仏教学派の文献のような、他の研究者がまだ言及していない資料。南北朝仏教学派についての現存文献には、『大般涅槃経集解』七十一卷、『大般涅槃経義記』十卷、浄影寺慧遠『大乘義章』二十六卷のようなあまりにも膨大な仏教文献がありますが、菅野博士先生の『大般涅槃経集解研究』、吉津宜英先生の『大乘義章研究』が後学の元となる研究でした。南北朝仏教学派研究を行うには、まずこれらの文献を解読し、整理しなければなりません。

二、コンピュータによる『大正藏経』、『続藏経』の検索。隋唐仏教者の著作、特に吉藏・智顛の著作に、南北朝仏教学派についての資料が見られる。

三、日本・韓国の仏教文献を十分に利用する。隋唐時代に、大量の日本・韓国の和尚が中国へ来ているため、彼らの著作にも南北朝学派についての文献が残っています。たとえば最澄の『法華秀句』にある靈潤の資料、凝然の『華嚴孔目章発悟記』にある道基の『撰論章』などの資料は、大変貴重なものです。

四、敦煌遺書の整理、利用、研究は南北朝仏教学派の研究に最も重要な意義を持っている。これは、この二三月に、大谷大学図書館で敦煌卷子を抄録するときに感じたことです。

五、考古学、文学の資料も南北朝仏教学派研究の視野に入れるべきです。大住石窟と靈裕、小南海石窟と僧稠などの文学的記録は歴史の記録でもあります。

これらの「新資料」の発見は、「新方法」によらなければなりません。これこそが、私が提起した「総合的研究方法」であります。いかなるものでも、研究対象に入る特定の一つの道でしかなく、いかなる方法もその特定の役割があるはずで、よりよく研究対象に入るためには、各種の研究方法を総合した方法、すなわち「総合的研究方法」を活用しなければなりません。湯用彤は「文字考証」のほかに、「同情の默応」、「心性の体得」を言っていますが、それを真剣に考

えなければなりません。私が提唱する「総合的研究方法」は言語文献、歴史考証、思想史、哲学的解釈を含み、研究の過程において、異なる方法を活用しなければなりません。

文献学は近代欧米、日本で流行していた研究方法で、数ヶ国語に精通し、言語学と目録学の蓄積がなければできません。現代の文献研究は、主に電子文献検索システムを活用します。『大正蔵』、『統蔵』の電子化の完成に従い、研究者の文献利用頻度も大幅に高まりました。仏教と敦煌学との融合は、仏教文献学の視野を広げました。

歴史考証学は、信憑性のある客観的歴史資料を基礎に、真相を確定する学問で、文献学と深く結びついています。しかし、かつて「大胆に仮説を立て、小心に考証する」と胡適は言っていますが、ポスト歴史学の「歴史とは人間が構造した知的系譜だ」ということも参考にしなくてはならないと思います。私は、地論学派の南道、北道を研究するとき、「南道、北道の違いは、隋時代から始まったのではないか」という大胆な仮説を立てました。淨影寺慧遠と靈裕、志念との食い違いから、根本的な差異が生まれたのです。これについてはまだ執筆中ですので、何かご教示いただければと思います。

哲学解釈学は哲学の概念である思想を分析し、把握する研究方法です。たとえば、撰論学派を研究するにあたり、真諦訳のテキストを対照することによって真諦の主張する思想体系は、瑜伽行派のそれを中心としながらも、如来藏縁起にたどり着くに違いありません。私は真諦の思想体系の真如と阿黎耶識との関係を「立体式」、「対立かつ否定」的存在関係だと提起しました。そして『起信論』の不生不滅の真如理体と有生有滅の妄識とは、「平面式」、「融合式」関係にあると思います。両者の微妙な区別が、二つの思想体系をなしたのではないのでしょうか。

仏教的存在論は「過程存在論」であることを強調したいと思います。³これは西洋存在論との最も重要な区別です。「行無常」、「諸法無我」こそ過程存在の最もよい現れです。佛教は解脱を重要視する宗教です。いかなる思想的解釈も宗教的解脱を最後の終着点としますので、私は「解脱解釈学」を提起し、仏教哲学の実践論と解脱論の特色を解明し、「涅槃

槃寂靜」を「解脱解釈学」の根源にしたい。私が言う「過程存在論」、「解脱解釈学」は三法印から来ています。それを仏教学研究と現代的解釈に応用しただけです。そして「解脱解釈学」の核心は「性修不二」の構造で、真理と修行との関係を露にしたのです。これはインド、中国、日本の大乘仏教に体现されています。

以上をまとめてみますと、南北朝仏教学派について、次のようなことがいえるのではないのでしょうか。①敦煌遺書の利用が本研究の重点ですが、文献作者、時代、所属学派、経録などの考証は難点です。②複数の人が、複数の経論を論じているため、どれがその学派研究にとって大事かが難点のひとつです。③隋唐仏教著作にある零細な見方をどの学派にするかを判断することが難しい。④『大涅槃経集解』、『大智度論抄』及びその他の論疏は思想の重点だが、内容があまりに多くかつ雑多であることが難しいところです。⑤各種の研究方法、特に存在主義、現象学など現代西洋思想を利用する場合、研究自体がばらばらになることも難点のひとつに教えられるでしょう。

二 中国仏教懺法の研究

懺法とは修行をより積極的に行うためにかつての罪を懺悔する宗教的儀式です。中国仏教懺法はインドを起源として、南北朝の発展を経て隋唐時期に大流行しました。宋の時代に、僧侶が信者を指導し、または信者の代わりに懺法を修行しました。懺法は中国仏教の民間において最もよく行われたものの一つとなっております。

中国仏教における懺法の研究は現代仏教研究の「新課題」であり、「新資料」と「新方法」を利用しなければ、新たな突破を得られません。一九九八年から、私は仏教懺法の研究を始めましたが、最初に書いた論文が『梁皇懺』でした。数年間を経て少しは成果を挙げていますが、『中国漢伝仏教礼儀』、『中国仏教懺法研究』を出版しました。次は私の感想を述べさせていただきます、懺法研究についての視点と方法をお話したいと思っています。

懺法は仏教が宗教として最も社会においてよく行われているものです。一般階層から上流階層まで、懺法活動を行わ

ないものではありません。懺法研究はまず懺法儀式の文献を個別に研究しなければなりません。

- 1 文献、歴史、思想等の方法に準拠して、懺法儀式の製作、伝播とその内容を一つ一つ検証すること。
- 2 懺法儀式とその他の懺法儀式との関係を考察すること。
- 3 懺法儀式を中国仏教宗派と結びつけなければ、儀式の真の意味での特徴を理解できません。たとえば浄土教の懺法儀式は懺悔と念仏の関係を強調し、天台宗は懺悔と止観の関係を強調し、華嚴宗の儀式は天台宗と深く関係するが、それ自体の特徴を持っています。

私は文献学と思想史的考察を通じ、歴朝歴代の懺法文献を収集し、懺法発展の源、変化の過程を考察したいのですが、これは一種の編年史的研究になると思います。

- 1 時代編年史の方法により、中国仏教懺法の発展を研究する。具体的には漢晋、南北朝、隋唐、宋元、明、清、近現代の区分となります。

- 2 懺法研究を歴史的時空におき、教団史、制度史、経済史を中心に歴代の懺法の製作、実践を詳細に考察し、異なる時代の異なる形態を研究することができます。

- 3 仏教宗派は、異なる発展段階に異なる懺法があります。たとえば、宋代の華嚴宗の懺悔儀式は、天台宗の影響を受けて、浄源は新たに懺悔儀式を改造しました。

- 4 各時代に流行した懺悔、修行者の信仰状態を考察するには、僧侶団体、皇室、民衆の懺悔方式に注意し、石窟、石像の題記にある懺悔思想の表現形式を検討しなければなりません。

- 5 現代中国仏教圏の懺悔信仰を調査します。例えば中国大陸、台湾、香港及び東南アジアなど。

最後に、題記などの文献を通して、宗教社会学、宗教心理学、宗教倫理学を活用して民衆の懺悔心理と信仰形態を分析し、現代の視点から仏教懺法の社会、寺院に与える影響および修行者の心理に与える影響を重点的に研究します。そ

してフィールド調査と結びつけて、仏教懺法の現代社会における変化と存在状況を考察します。

それから、縦方向に見ますと、懺法の中国仏教社会文化における真の姿および中国民衆の信仰心理を見ることができません。中国仏教懺法の研究を通して、われわれは仏教の中国化の具体的な一面、「エリート仏教」と「大衆仏教」の衝突と転換、思想哲理、宗教教義と社会実践との結合を見ることができ、それによってよりよく中国仏教の内的生命力と矛盾を見ることができないでしょうか。

懺悔は世界各宗教に共通するもので、仏教、キリスト教、イスラム教の懺悔方式の比較を通して、他の宗教特にキリスト教の懺悔儀式を吸収し、仏教懺法の現代への転換を促すことができます。

以上報告したのは、私がいま研究している南北仏教学派、仏教懺法の感想です。どうか、ご在席のみなさまからご指導をいただきたいのです。ご清聴ありがとうございました。

注

- 1 陳寅恪『陳垣敦煌劫後餘序』、『金明館從稿二編』、北京：三聯書店、二〇〇一年、二六六頁。
- 2 湯用彤『漢魏兩晋南北朝佛教史』（下冊）「跋」、北京：中華書局、一九八三年。
- 3 Florin Giripescu Sutton は二つの存在論 (Ontology) を提起してゐる：一、實在 (substance) 不変性 (immutability) である (Being) 哲学、二、過程 (process) 内在変化と超越 (dynamic change and transformation) 将来的存在 (becoming) Existence and Enlightenment in the Lanikavata-sutra: A Study in Ontology and Epistemology of the Yogācāra school of Mahāyāna Buddhism, State University of New York Press, Albany, 1991, p. 26.

「特別研究員研究発表会」 二〇〇七年六月一四日 於 メディア演習室